

Title	書評リプライ
Sub Title	
Author	木村, 真希子(Kimura, Makiko)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2014
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.19 (2014. 7) ,p.109- 110
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評 目次のタイトル: 「著者リプライ」
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20140705-0109">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20140705-0109</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

---

## 書評リプライ

木村 真希子

---

最初に、多忙ななか書評を執筆してくださった石坂晋哉氏に感謝したい。石坂氏は現代インドの環境運動について『現代インドの環境思想と環境運動』(2011)を上梓され、ガーデンディー主義者の環境運動家バフグナーの思想と実践を分析した。筆者にとっては、南アジア研究で数少ない社会学的なアプローチを取る研究仲間であり、ここ数年は南アジアの社会運動に関する共同研究を行ってきた。今回の書評も本書の目的を的確に捉えた上での評価と指摘であり、非常に参考になった。

紙幅の制限があるため、リプライの内容は後半の石坂氏による本書の弱点に絞って応答したい。石坂氏の批判は、「集団単位の合理的行動モデルは・・・集団間の境界を固定化し、集団内部の差異を等閑視してしまいがちになる」というものであり、「集団単位の『エージェンシー』だけではなく、集団内のひとりひとりの、よりミクロなレベルの『エージェンシー』を、もう少し描くことはできなかつたのだろうか」というものである。

まず、本書ではなぜ、主にティワなど、攻撃者の側をエスニック集団単位で分析したのかについて確認しておきたい。集合的暴力については、多くの場合がエスニックな単位を境界線として起きることが指摘されており、実際にインドにおける暴動のほとんどがヒンドゥ・ムスリムの宗教集団を単位として敵味方の区別がなされている。なぜエスニックやナショナルな境界が集合的行動の単位となるかについては、インドという国民国家の成立とナショナリズムのあり方について踏み込まなければならないため、ここでは深く立ち入らないが、いずれにせよ本書ではまず、エスニック/ナショナルな集団的対立軸に沿って人々が行動する過程について、リアリティをもって描くことを目的とした。

さらに、本書では、どちらかといえばそれまで「アッサムの中の『土地の子(=地元の人々)』や運動の支持者がムスリム移民を襲った」という「土地の子対ムスリム移民」という対立軸ではなく、土地の子の中でもさらに経済的、社会的に後進層とみなされ、差別されてきた先住民族であるティワやコッチなどの人々の意思決定過程に焦点を当てた。その意味で「民衆のエージェンシー」を取り上げ、アッサム社会内の多様性を示すことが本書の第一の目的である。確かに、ティワなどの集団のあいだでも、攻撃に反対した人やムスリムに事前に警告した人の証言に行き当たることはあった。そこを丁寧に拾うことにより、集団単位では括りきれない人々のエージェンシーを描くことはできたのかもしれない。しかし、そうした集団とは異なる単位の個人のエージェンシーを描くことは本書の第一の目的とは異なる課題であり、上述のような本書のねらいが曖昧になることを危惧し、そちらに焦点を当てることはしなかった。今後の研究課題として検討したい。

木村真希子「書評リプライ」

『三田社会学』第 19 号 (2014 年 7 月) 109-110 頁

さらに、石坂氏は「現地の人びとが集団の境界を越えて対話を図るためには、研究者の側も、民族や宗教・宗派等のアイデンティティやカテゴリーの過度の固定化につながりかねないような記述をできるだけ避けるとともに、人びとが実際に集団の境界を越えて・・・動いているようなモーメントを発掘し、そこに積極的に光を当て、そこから問題解決の可能性を模索しようとする努力が重ねられてきた」と指摘する。確かに、攻撃者の集団に属する人々の間にも、反対する人々や匿おうとする人々がいたことは希望をもたらす。しかし、集団の意思決定に反して個人が行動を起こすことのみが、果たして問題解決につながるのだろうか。

まず、現代社会において、アイデンティティの強調というのは必ずしも排外主義やマイノリティの抑圧につながるものではない。むしろ、マイノリティがそれまでの差別や抑圧的なレッテルに対して声を上げ、積極的な集団のアイデンティティを構築することが差別の克服につながる事例も見受けられる。問われなければならないのは、「どのような状況で排外主義やマイノリティの抑圧につながるのか」ということであって、集合的アイデンティティの分析がすべて「アイデンティティやカテゴリーの過度の固定化につながる」ということになるわけではない。

また、「集団の意思決定に反して動いているようなモーメントを発掘し、そこに積極的に光を当て」ることだけが唯一の和解の道なのだろうか。ネリー地域において、攻撃に反対した人がいた事、自分たちを匿おうとしたり、事前に危険を警告してくれたティワやコッチの人々がいたことはムスリムの人々も承知している。しかし、それは現時点では、「いい人もいるけれども、やはり全体としてティワは攻撃の決定を下した」と解釈されるに過ぎない。集合的に決定し、集合的になされた行為に関しては、集合的な罪の認識に基づいた謝罪がなされなければ、被害を受けた側は正義が達成されたと受け止めないだろう。

いずれにせよ、石坂氏の書評からは和解の問題や、集合的暴力とアイデンティティの関係を考える上で多くの示唆を得た。今後の研究をすすめる上で新たな課題として取り組みたい。

(きむら まきこ 津田塾大学)